

Fairy Tail 虚弱のバーテンダー

Campus#R

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

11X777年

幼い滅竜魔道士の元からドラゴンが消えた同じ年にとある闇ギルドが一夜にして消滅した。

山間部にあったその闇ギルドは周囲に住民はおらず、偶然遠くから見ていた警備兵は青い炎が煌々としていたという。

そして塵も残らなかったその場所には一人の少年のみが残されていた。

※この主人公はCODE:BREAKERのエンペラーの能力を少し改変したものになります。クロスオーバーでは無いので悪しからず！

※他のCODE:BREAKER能力のキャラは今の所出す予定はないです。

※恋愛色強めに行く予定です

目次

プロローグ

1777年

闇ギルド『エビルガーデン』消滅事件

フィオーレ王国の山間部に構える闇ギルドが一夜にして消滅。

遠方より見掛けた警備兵によると青い炎が煌々としていたとの事。

奇妙にも周囲への影響は皆無。被害は闇ギルド以外の民間人には

何一つ無かった。

ただ最も奇妙だったのは、光の後には遺体も骨も灰すらも残さず一人の少年のみがそこにいたという。

「また大層な事件じゃったのお…」

評議員の一室でお茶を飲みながら新聞を読むのはフェアリーテイル3代目マスター マカロフ・ドレアー。

「なんじゃマー坊。普段から街中を破壊スとする様なギルドには珍しくもないさね」

向かいでからかうような笑みを浮かべるヤジマ。

「いや申し訳ないのおヤン坊。バカ共にはきちんと言っておく」

「ええよ、いッものの事さ」

魔道士ギルド『フェアリーテイル』はフィオーレ王国屈指のギルドでありながら、その理念よりやりたい放題。街中の器物破損や山中の地震など枚挙に遑がない。

本日もカエデの町にある教会を半壊させたとして、マカロフは評議員より呼び出しを受け、その後ヤジマの部屋でくつろいでいた。

「で、話とはなんじゃ？正直もう小言はうんざりなんじゃが…」

「ツがうよ。いやタス確かにフェアリーテイルにはもう少し控えてほしいと常々思つとるけども。頼み事さね」

「頼み事？」

「ウム。来なさい！」

部屋の奥へ呼びかけると一人の少年が歩いてきた。

歳は10歳を超えた頃。短く切られたダークアッシュの髪にくつきり整った顔立ち。ブラウンがかかった瞳。

「……っ！」

少年はマカロフと目が合うと小走りでヤジマの椅子の後ろへと隠れた。

「ふむ、誰じゃその子は？ヤン坊所のお孫さんか？それにしてもあんまり似とらんかう」

「残念ながらツがうよ。さつき見てた新聞記事あつたらろ？」

「ああ」

「この子はその生き残りさね」

「なに!？」

椅子の背から覗く少年をまじまじと見つめる。恥ずかしそうに俯いた少年には、闇ギルド消滅に関わったとはとても思えなかった。

「匿つとるのか？」

「ああ、あのズ件事の後にな。内々に処理出来れば良かったんじゃが、生き残りがいたという情報を止める事が出来んでな。そろそろここに置いておくのも厳しい。」

「なるほど。その頼みつてのは」

「ウム。この子をフェアリーテイルで引き取つてはくれんか」

「…評議員では出来んのか？」

「残念ながら。というのも当事者であるはずのこの子はそれより前の記憶を覚えていないようだな。何かスら証言出来れば身の潔白は証明出来たかもスれんが…。」

闇とはいえギルド一つが一夜にスして消滅じゃ。このままでは危険人物と判断されて処刑されるやもスれん」

「そうか……」

悲痛に顔をしかめるマカロフ。

（どうする？受け入れるとしてもこの子が安全な保証は無い。無いが……）

「不安なのはわかる。じゃがこの子を預けれるのはマー坊スかおら

ん。頼む。引き受けてはくれんか。」

少し悩んだ末、マカロフは立ち上がりヤジマの椅子の後ろで隠れている少年へと歩いていった。

「よー」

「!!……」

目線を合わせて見つめれば、驚いた様に肩を竦ませ、下を向く。

「お主はこれからどうしたい?」

「……?」

不思議そうに顔を上げれば優しい顔が見えた。

齢10を過ぎる少年には不釣り合いなほど純粋な瞳に映るのは、安心を感じさせる暖かな瞳。

その目につられるように自然と言葉は流れ出した。

「……ぼくは……誰かと一緒にいたい。目が覚めて周りには何も無くて、朝日だけが誰かも分からないぼくを差してくる。知らないが襲ってくるんだ。

もう、あんな孤独は……感じたく、ない……」

流れ出した言葉は自然と震えて、涙が伝う。

そこに居るのは打算も嘘も悪意も無いただの少年だった。

「…ヤン坊。この子はウチで引き取ろう」

「マー坊……」

「最近同じ歳くらいの子の身寄りのないガキ共がウチにいる。あいつらと過ぐせば何も問題は無いだろう。」

「…恩に着る」

「なーに!その分今後については多めに見てもらえると助かるわい!

して、この子の名前は?」

「本人は覚えていないようだな、ワスが付けた。名前はミデン。ミデン・メガロセウス」

「ミデンか。ではミデンよ。」

「?」

涙の流れるまま前を向けば、手が差し伸べられていた。

「ワシらの家族になろう。もうお主を一人にせんよ。約束じゃ」

そうして嘘偽りの無いその言葉に、ミデンはマカロフの手を取った。

バタリ

そしてそのまま倒れた。

「ええー！ー！なんでー！ー！！」

「いかん！無理をさせ過ぎた。マー坊、すまんが隣のベッドで寝かせろ。ミデンはまた後日引き取りに来てくれ」

「待てい！どうなつとるんじゃ？ミデンは大丈夫なんか!?!」

「この子は体力が無いうえに虚弱体質タイスツでな。5時間も動き続けると倒れてしまうんじゃ。今日はもうかれこれ6時間くらいじゃな。ただ、これなら少し寝れば治る」

「そ、そうか。また難儀な子じゃなあ」

数日後。マカロフに手を引かれてミデン・メガロセウスはマグノリアにあるギルドへとやって来たのだった。

「ようこそフェアリーテイルへ」